



気狂いピエロ【2Kレストア版】

1965年(2015年2Kレストア版) / フランス映画
配給: オンリー・ハーツ / 110分

2022(令和4)年5月17日鑑賞

テアトル梅田

監督・脚本: ジャン＝リュック・ゴダール
出演: ジャン＝ポール・ベルモンド / アンナ・カーリーナ / グラツィエラ・ガルヴァーニ / ダーク・サンダース / サミュエル・フラール / ジミー・カルービ

👁️👁️ みどころ

ジャン＝リュック・ゴダール監督×ジャン＝ポール・ベルモンド×アンナ・カーリーナが、三者三様のキャリアの“臨界点”で奇跡的に一度限りの大結集！

「自由！挑発！失踪！」を合言葉に、目くるめく引用と色彩の氾濫、そして、饒舌なポエジーと息苦しいほどのロマンチズムは、フランスのヌーヴェル・ヴァーグの最高傑作だが、その理解は難しい。そもそもヌーヴェル・ヴァーグって一体ナニ？知ったかぶりをせず、その代表作からそれをしっかり考えたい。

ちなみに、“気狂い”という日本語は今では“放送禁止用語”として定着している。しかし、それを××と伏字にするのはナンセンス！だって、ピエロくんの“気狂い”ぶりが本作のエッセンスなのだから。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆1960年代、「青春映画の日活」の女優では、浅丘ルリ子、芦川いづみは少し先輩格、吉永小百合はダントツの別格としたうえで、若手女優の“お好み”としては、和泉雅子派 VS 松原智恵子派に分かれていた。それと同じように、1960年代のフランス映画の女優では、カトリーヌ・ドヌーヴ派 VS ジャンヌ・モロー派に分かれていたが、男優では、アラン・ドロン派 VS ジャン＝ポール・ベルモンド派に分かれていた。私はアラン・ドロン派だったため、『太陽がいっぱい』（60年）の魅力にハマったうえ、その後の彼の主演作はほとんど観ているが、その反面、ジャン＝ポール・ベルモンドの主演作は見逃していた。

しかして今、ジャン＝リュック・ゴダール監督作品にジャン＝ポール・ベルモンドが主演した『勝手にしやがれ』（60年）が「4Kレストア版」（20年）で、『気狂いピエロ』（65年）が「2Kレストア版」（15年）で復活！こりゃ必見！

◆「自由・平等・博愛」を旗印として、1789年にフランス革命を起こした国フランスが“革命の元祖”なら、ジャン＝リュック・ゴダールは、フランソワ・トリュフォー、アラン・レネ、ジャック・ドゥミらと並んで、フランスのヌーヴェル・ヴァーグの元祖。も

っとも、ヌーヴェル・ヴァーグって一体ナニ？そう正面から問われると、答えに窮する人も多いはずだ。

しかして、「自由！挑発！疾走！」の言葉が氾濫し、目くるめく引用と色彩の氾濫、そして、饒舌なポエジーと息苦しいほどのロマンチズムに満ちた本作は、まさにそれだ。しかも、ゴダールのミュージズでありながらゴダールと離婚したばかりの美人女優アンナ・カーリーナと、『勝手にしやがれ』で大スターになり本作でゴダールと決別することになる俳優ジャン＝ポール・ベルモンドを共演させた、35歳のゴダールの長編10作目となる本作は、三人三様に「各自がキャリアの臨界点で燃焼しつくした奇跡的とも言える作品」とされている。こりゃ必見！

◆本作がフランスのヌーヴェル・ヴァーグの代表なら、アメリカン・ニュー・シネマの代表は『俺たちに明日はない』（68年）。1930年代のアメリカ西部に実在した、ボニーとクライドという2人の銀行強盗を主人公にした同作は、ベトナム戦争が泥沼化する中で激動期にあった1968年のアメリカで、『卒業』（68年）とともに、若者たちの圧倒的的支持を受けて大ヒット！ボニー役を演じた女優フェイ・ダナウェイは、アカデミー賞主演女優賞にノミネートされ、この一作でアメリカン・ニュー・シネマのトップ女優の地位を獲得した。

同作は、銀行強盗に入ったボニーとクライドが逃走するシーンからスタートするが、本作では、金持ち女と結婚し退屈な生活を送っている男フェルディナン（ジャン＝ポール・ベルモンド）が、娘のシッター役としてやってきたかつての恋人マリアンヌ（アンナ・カーリーナ）と再会するところからスタート。そして、共に一夜を過ごした2人が、翌朝、見知らぬ男の死体を発見したうえ、2人が協力して“ある殺人”を執行するところから2人の逃避行が始まっていく。

◆フランスのヌーヴェル・ヴァーグの何たるかはよくわからないが、そこでの最大の教えは、「考えるな！」「感じろ！」ということらしい。

カトリーヌ・ドヌーヴが主演した『シェルブールの雨傘』（64年）は、ハリウッドのミュージカル名作とは異質のミュージカル映画だったが、本作でもいくつかのシーンで突然、アンナ・カーリーナ扮するマリアンヌが歌い始めるのでそれに注目！これは一体ナニ？その違和感は半端ナイ。また、フェルディナンというれっきとした名前があるのに、マリアンヌは盛んに彼を“ピエロ”と呼んでからかっているが、その真意は？それに対して、毎回、「俺はフェルディナンだ」と切り返すシーンにはいい加減あきてくるが、ジャン＝リュック・ゴダール監督は、なぜこれを最後まで繰り返させたの？いやいや、そんなふうを考え、悩むことはナンセンス！？感じろ！ただ感じろ！なるほど、なるほど。

2022（令和4）年5月20日記